

「13人の油絵」 + Y Gallery 2018.12.8.Sat – 2019.1.26.Sat (年末年始休廊 12.23-1.8)

越前谷 嘉高／大森 博之／加藤 学／北辻 良央／黒須 信雄／駒形 克哉／
竹内 義郎／橋本 倫／松本 尚／山崎 豊三／山本 藍子／吉原 英里／平田 剛志 (美術批評)

info@plus-y-gallery.com <http://www.plus-y-gallery.com>

油絵の見方

平田 剛志

油は避けられている。近年、ダイエットや健康の観点から油は悪影響なのだという。食材と調味料のメディウムとなってきた油も、近年の健康志向の変化に伴い、その存在が問い直される状況となっているのだ。

食品の影響は美術界にも及ぶ。美術界で主流となってきた「油」絵が衰退、忌避される状況となっているのだ。芸術もメディウムの変化を余儀なくされている。

20世紀美術を遡れば、マルセル・デュシャン（1887-1968）は1912年ごろに絵画を放棄し、以後は既成品を用いたレディメイド作品を中心に発表した。ジャクソン・ポロック（1912-1956）はエナメル塗料やアルミニウム塗料を用いて床に広げた支持体に描いた。アンディ・ウォーホル（1928-1987）は活動初期にはアクリル絵具による絵画を制作したが、後に大量量産・流通ができるシルクスクリーンや映画を制作した。彼らは絵画の描画材に油絵具を選ばず、1950年代に発売されたアクリル絵具や工業製品、既成品を用いた。

この変化は、何を物語っているのだろうか。それは、絵画技法というシステムの解体であり、メディウムが抽象的なものへと変化したことだ。例えば、ウォーホル以降のコンセプチュアルアート、インスタレーションや映像、メディアアートなどを見れば、メディウム・技法が物質から不可視の電子・通信媒体、人や地域、場所との関係性やコミュニケーションを表現することが主流となっているのだ。では、「油絵」はその役目を終えたのだろうか。

その前に、そもそも油絵はなぜ誕生したのだろうか。その理由の一つは再現的模倣であった。簡潔に言えば、3次元の世界を2次元の平面上に再現するための技法である。油絵具の使用は、12世紀頃から見られ、ルネサンス以降にかけて本格的に発展する。

その特徴は、透明度が高く、絵具層を積層させることで、空間の奥行きや光を表現できることだった。他には隠蔽力、乾燥が遅いため修正が容易であること、堅牢性などが挙げられる。それは、自身の眼で世界の対象物を見て、自身の手の感覚で描く喜びだった。

これら油絵の特徴に筆者は「匂い」を加えたい。美術館では制作されてから年月を経た作品が収蔵されるために匂いを感じることはない。だが、ギャラリーでの展示においてはドアを開けた際に「匂い」を感じることもある。これは、油絵の乾性油が空気中に触れることで生じる「油臭」である。

複製芸術やデジタル作品が主流となっている現在、素材に「匂い」があることを忘れるが、油絵は匂い立つ絵画なのだ。

もちろん、写真の現像液、木彫の木材、染色の染料など、匂いを発する素材は珍しいことではない。だが、これらの匂いは、消えるのが早く、あるいは立体物であるため油絵とは異なる見方をするものである。

そのように考えると、ギャラリーの空間は完成したばかりの油絵の「匂い」をもっとも充満させている空間だろう。こればかりは、ギャラリーを訪れないとわからない。美術作品の鑑賞とは、光や色、匂いなど自らの身体と五感によって絵画を見ることにほかならない。もし油絵の終焉があるとすれば、それは人間の眼と身体の終焉なのかもしれない。

平田剛志 HIRATA Takeshi

1979年東京都生まれ。美術批評。多摩美術大学美術学部芸術学科卒業。専門は近現代美術史、視覚文化論、吉田初三郎の鳥瞰図。2012～2017年まで京都国立近代美術館研究補佐員。最近の論考に「Think Twice」『Jun Fujiyasu's Work 2008-2017』（藤安淳、2018）、「現代美術の古写真 『態度が形になるとき 安齊重男による七〇年代美術』、『パンのパン 02 展覧会評盛り沢山号』（2018）など。